

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-21- (2面)
- ・「食料・農業 知っておきたい話」-21- (3面)
- ・ハラル牛肉輸出に取り組む 全開連 (4面)
- ・個人の起業数過去最高 (5面)
- ・キュウリ循環型養液栽培開発 (6面)
- ・分娩前4週間以上繋留 (7面)
- ・人工乳にシロ糖添加で早期発育有効 (8面)
- ・畜産物需要見通し (8面)

# 開拓情報

発行所  
公益社団法人全国開拓振興協会  
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13  
TEL 03-3586-5843  
FAX 03-3586-5846  
ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp  
全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

## TPP緊急国民集会に3000人

### 国会決議の実現と情報開示を

全国農協中央など生産者団体や生協などの消費者団体で組織する実行委員会は5月14日、東京・日比谷野外音楽堂で、「TPP交渉における国会決議の実現と情報開示を求める緊急国民集会」を開催した。全国から農林漁業関係者、消費者ら約3000人が集まった。萬歳章全中会長の主催者代表挨拶に続き、連帯挨拶、決意表明、与党国会議員の代表挨拶が行なわれ、特別決議を採択した。

集会は、シンガポールでのTPP閣僚合を5月19、20日に控え、国会決議の「農林水産物の重要品目について、引き続き再生産可能になるよう除外または再協議の対象とする」と、「国民への十分な情報提供を行い、幅広い国民的議論を行うよう措置すること」など「政府は守秘義務を理由に情報を閉ざしたりするのではなく、消費者や生産者の懸念や不安を払拭するために情報開示の方法を抜本的に改善すべきだ」と訴え、「日本の食料と暮らしのいのちを守り、次世代につなぐため、国会決議が実現されるまで国民運動に全力を挙げよう」と述べた。

続いて、日本生活協同組合連合会の浅田克己会長が連帯挨拶。全国農業会議所の二田孝治会長ら



## 畜産経営対策強化求める 連盟が緊急要請



全日本開拓者連盟は5月14日、政府、自民党に対し、畜産経営に対する緊急要請を行った。西谷悟郎委員長、中央常任委員ら10名が、農水省の生産畜産部原田英男部長(写真)と、自民党は衆議院の森山裕議員、竹下巨議員に要請した。

西谷委員長は、「畜産略農業は、慢性的な燃費意に伴う、国内畜産農業者の経営が厳しくなっており、国際貿易交渉への対応」

・日豪EPA協定の合意に伴う、国内畜産農業者への影響

・TPP交渉において、EPAや最終局面と思われるTPPなどの国際貿易交渉の妥結次第では多大な影響をもたらす懸念があり、厳しい経営環境にさらされている。再生産可能な持続的経営安定対策の強化が喫緊の課題」として、早急な対応を求めた。

要請の重点事項は次のとおり。

1 国際貿易交渉への対応

・日豪EPA協定の合意に伴う、国内畜産農業者への影響

・TPP交渉において、EPAや最終局面と思われるTPPなどの国際貿易交渉の妥結次第では多大な影響をもたらす懸念があり、厳しい経営環境にさらされている。再生産可能な持続的経営安定対策の強化が喫緊の課題」として、早急な対応を求めた。

2 経営安定対策

・国内畜産酪農経営に関する現行制度の実施状況や生産現場の実態を踏まえ、万全の対策を講ずること。

・肥育経営の資金繰りに支障をきたしている状況下、生産者負担割合の減額措置等、制度設計の見直しを含め、実態に即した更なる対策を早急に講ずること。

・酪農経営は、乳価引上げなど対策の強化は図られたものの、いまだ万全の対応とは言い難く、日豪EPA、TPP交渉への懸念もあり、経営不安から脱却できずにおり、良質生乳の安定的供給を維持するために、国内生産基盤強化対策を早期に講ずること。

③豚流行性下痢(PED)等の発生もあり、国内防疫体制の更なる強化を図ること。

④配合飼料価格安定制度の充実強化

・同価格安定制度が円滑に運用できるよう、十分な財源確保を図るとともに、制度の更なる見直しを行い、畜産経営の安定を図るべく充実強化を講ずること。

## 移動制限解除 熊本鳥インフル

熊本県は5月1日、4月13日に高病原性鳥インフルを三唱して閉会。集会終了後、参加者らは霞ヶ関や永田町の官庁街、国会周辺をデモ行進した。

熊本県は5月1日、4月13日に高病原性鳥インフルを三唱して閉会。集会終了後、参加者らは霞ヶ関や永田町の官庁街、国会周辺をデモ行進した。

熊本県は5月1日、4月13日に高病原性鳥インフルを三唱して閉会。集会終了後、参加者らは霞ヶ関や永田町の官庁街、国会周辺をデモ行進した。

熊本県は5月1日、4月13日に高病原性鳥インフルを三唱して閉会。集会終了後、参加者らは霞ヶ関や永田町の官庁街、国会周辺をデモ行進した。

熊本県は5月1日、4月13日に高病原性鳥インフルを三唱して閉会。集会終了後、参加者らは霞ヶ関や永田町の官庁街、国会周辺をデモ行進した。

## TPP 日米協議大筋合意見送り 米国が牛・豚肉で譲歩要求

TPP(環太平洋連携協定)交渉をめぐる日米協議は、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

TPP(環太平洋連携協定)交渉をめぐる日米協議は、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

TPP(環太平洋連携協定)交渉をめぐる日米協議は、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

声明は、「両国は、TPPに関する2国間の重要な課題について前進する道筋を特定した」と述べた。米国の日本に強く譲歩を求め、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

声明は、「両国は、TPPに関する2国間の重要な課題について前進する道筋を特定した」と述べた。米国の日本に強く譲歩を求め、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

声明は、「両国は、TPPに関する2国間の重要な課題について前進する道筋を特定した」と述べた。米国の日本に強く譲歩を求め、4月24日の安倍首相とオバマ大統領との首脳会談と、その後に行われた日米TPP担当相とフロマン米通商代表部(USTR)代表との関係協議では、大筋合意

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

# とうもろこし・大豆 生産量史上最高に

## 14/15年度 米国農務省需給見通し

米農務省は5月9日（現地時間）、14/15年度の第1回世界および主要国の穀物・大豆に関する需給見通しを発表した。それによると、同年度の穀物全体および大豆の生産量は消費を上回ると見込んでいる。

世界の穀物全体の需給率は20・9割（同0・1）、大豆は24・8割（同0・7割増）となる見込み。この結果、期末在庫量は前年度より増加して5億769万ト（同

1・2割増）、期末在庫量は、生産量が24億3493万ト（対前年度比1・3割増）と上昇し、安全在庫水準（17・8割）を上回る見込み。穀物の主品目のとうもろこしと大豆の動向は次回より上昇。

【生産量】9億7908万ト（対前年度比0・01割増）、消費量9億6577万ト（同1・8割増）、期末在庫量1億8173万ト（同7・9割増）、期末在庫率は前年度より上昇。

【生産量】2億9982万ト（対前年度比5・6割増）、消費量2億8058万ト（同4・0割増）、期末在庫量1億823万ト（同22・8割増）、期末在庫率は前年度より上昇。

【生産量】29・3割増（4・5割増）

### 農業生産関連販売総額6.6%増

#### 6次産業化総合調査

農水省はこのほど、農業・農村の6次産業化総合調査の結果（12年度）を発表した。農業経営体および農協などによる農産物の加工、農産物直売所および農家レストラン、農業経営体による観光農園、農家民宿などの農業生産関連事業の販売

金額、従事者数などを調査したもの。全国の農業生産関連事業による年間総販売金額は1兆7451億円、前年度に比べ6・6割増加した。前年度は東日本大震災の影響などで減少したが、回復がみられた。家族、雇用者などを合計した総従事者数は45万1200人で、前年度に比べ5・1割増加した。年間総販売金額を業態別にみると、農産物直売所が8448億円（全体数の48・4割）ともっとも多くなっている。

総事業体・農業経営体は6万6350で、前年度に比べ2・0割増加。総事業体・農業経営体数は8237億円（同47・2割）、観光農園が379億円（同2・2割）で、前年度に比べそれぞれ、6・6割、5・6割、0・8割増加した。観光農園は8850で、前年並みとなった。

そのほか、農家民宿の農業経営体数は1960で前年と同数、総販売金額は57億3100万円、前年度に比べ1・8割増加。今回、農協などによる農家レストランおよび農産物の輸出の数値を新たに調査した。農家レストランの事業体数は1480、総販売金額272億円。農産物の事業体数は120、総輸出金額57億円となっている。

# 知っていただきたい話

## 第21回

自らの保身のために国民を犠牲にしてはならない

オバマ大統領を「国賓」として迎え、必死に擦り寄った日本の姿はきわめて惨めであり、この国が対等な独立国家と見做されぬことを世界に晒した。総理自身が靖国参拝などで招いたツケを払うために、TPP（環太平洋連携協定）で国民の命や健康を犠牲にすることを土産により強要しようとするのは、自身の保身のために国民の命を売り飛ばすような行為であり、一国の総理としてあるまじきことである。

# TPP交渉のこれ以上の継続は生産現場を崩壊させる

東京大学教授 鈴木宣弘氏



「国民を欺く「譲歩」が「前進」なのか  
日米安保を「人質」にして共同声明の発表を遅らせてまでTPPでの一方的譲歩を強要する米国の理不尽な圧力を

目的の当りにして、日本国民も「米国の企業利益のために邪魔なものは命や健康を守る仕組みでも一切許さない」というTPPの正体を実感したはずだ。それに対して安倍総理が「大英断」で応じてしまつたことが心配されたが、何とか凌げられかにも見えた。

しかし、「すでに合意に達したが、畜産農家の多い鹿児島県議院の補欠選挙への影響も考慮し伏せた」という「密約説」も一部で流れており、TPP（環太平洋連携協定）で国民の命や健康を犠牲にすることを土産により強要しようとするのは、自身の保身のために国民の命を売り飛ばすような行為であり、一国の総理としてあるまじきことである。

「前進」なのか  
日米安保を「人質」にして共同声明の発表を遅らせてまでTPPでの一方的譲歩を強要する米国の理不尽な圧力を

「国民を欺く「譲歩」が「前進」なのか  
日米安保を「人質」にして共同声明の発表を遅らせてまでTPPでの一方的譲歩を強要する米国の理不尽な圧力を

豚流行性下痢の発生続く  
ワクチンの円滑な供給を

豚流行性下痢の発生続く  
ワクチンの円滑な供給を

豚流行性下痢の発生続く  
ワクチンの円滑な供給を

# ハラール牛肉輸出に取り組み

## インドネシア副大臣が視察

全開連

インドネシアの農業省 農球磨都錦町の全国開拓  
の一行が4月16日、熊本 農業協同組合連合会(櫻



挨拶する櫻井全開連会長、左側がインドネシア視察団

井德一代表理事(会長)人吉 食肉センターとセンカイミート(株)(萩原 新一代表取締役)の食肉処理施設などを視察した。一行は、ルスマン・ヘリアワン農業省副大臣、シユクル・イルワント農業省畜産総局長ら6名。同国は、日本でBSE(牛海綿状脳症)が発生するリスクを理由に輸入を認められなかったが、日本が昨年、OIE(国際獣疫事務局)からBSE輸出の実現に取り組んで低い「無視できるリスク」として認定されたこと、他の国への輸出と同様に衛生上の条件を満たしている。インドネシアの人口は、約2億4千万人(世界第4位)、うち9割近くがイスラム教徒でイスラム教の戒律に則って処理した食肉「ハラール(HALAL)」しか食せない。人吉食肉センター・センカイミートの施設は、イスラム教の戒律に則って牛肉を処理することを証明するハラール認証をインドネシアの認証機関から取得し(12年7月)、同国への牛肉・加工・輸送など、さまざまな要件が求められる。食肉を処理する施設がそれぞれの国から認証を受ける必要があるが、国や宗派によって要件の厳しさは大きく異なっている。

# 主要畜産物が低関税に

## EPA合意の詳細内容

4月7日に日豪EPA(経済連携協定)交渉が、牛タンやハラミなど大筋合意に至り、コメや食糧用麦、バター・脱脂粉乳、砂糖などは、関税撤廃の対象から除外・将来の見直しとなったが、牛肉はセーフガード(緊急輸入制限措置)を導入したうえで、関税が段階的に削減され、プロセスチーズ原料用ナチュラルチーズなどの無税輸入枠は拡大となる(表)。

00トから10年かけて2万9300トとする。豚肉・調整品等も関税を20%削減し、枠内税率を40%とする。豚肉は差額関税制度を維持した。鶏肉のうち、殻付き卵は関税撤廃の対象から除外。全卵・卵黄は3ヶ月以内で、卵白は即時に撤廃される。12年の豪州からの輸入量は、牛肉等が約2万200ト、鶏肉等は実績を00トから20年かけて徐々に拡大する。3年以内でセーフガードの冷蔵牛肉、冷凍牛肉それぞれの初年度、10年目までの発動基準数量は、初年度が冷蔵13万5000ト、冷凍19万5000ト、5年目が冷蔵13万6700ト、冷凍20万1700ト、10年目が冷蔵14万5000ト、冷凍21万ト。

12年の豪州からの輸入量は、牛肉等が約2万200ト、鶏肉等は実績を00トから20年かけて徐々に拡大する。3年以内でセーフガードの冷蔵牛肉、冷凍牛肉それぞれの初年度、10年目までの発動基準数量は、初年度が冷蔵13万5000ト、冷凍19万5000ト、5年目が冷蔵13万6700ト、冷凍20万1700ト、10年目が冷蔵14万5000ト、冷凍21万ト。

前年同期比1.7%超過になった場合に関税を引き上げる措置に代わり、新しいセーフガードが適用される。(昭和10年)、北滿開拓を志願し、満州国東北部の千振開拓地に渡り、大久松氏と結婚された。寄贈された資料は、満州開拓での生活、戦争による1年間の避難民生活を経てようやくの帰国、栃木県那須町の千振開拓地に入植・開墾したところなど詩歌を交えてつづった自分史です。

山形県生まれのヤスさんは、1935年お知らせ 栃木県開拓協代表理事組合長の櫻井徳一氏より、開拓に関する貴重な資料が寄贈されましたので、ご紹介いたします。(5月1日付) 退職 岩城和宏(参事兼務事業部長)、石城戸昭作(管理部長)、上柳英人(中部支所長)、北原弘昭(家畜診療所所長) 宮崎県乳肥農協人事 (4月21日付) 全日本開拓者連盟 役員会 19日 全国開拓振興協会 第2回定時総会、第8回理事会・第4回監事会 全日本開拓者連盟 第69回通常総会 20日 肥後開拓協第6回通常総会 25日 ゆうき青森農協第4回通常総会 開拓ながさき農協 第5回通常総会 26日 静岡開拓連第66回通常総会 27日 福岡県畜協第42回通常総会 佐賀県畜協第47回通常総会 28日 埼玉県開拓連第66回通常総会

ハラール認証に当たっては、イスラム教が摂取を禁止している豚などからの隔離、非ハラール製品と区別した状態での畜産物の輸送など、さまざまな要件が求められる。食肉を処理する施設がそれぞれの国から認証を受ける必要があるが、国や宗派によって要件の厳しさは大きく異なっている。日本におけるハラール認証と畜産物は3カ所(14年4月現在)。インドネシアのハラール基準での



# 開拓一世を慰労

島根県三瓶開拓酪農協

60歳以上の組合員を対象に慰労会を開催した。開拓一世の世代は、開拓祭などのイベントの参加が少なく、同じ開拓地に住みながら、顔を合わす機会がめっきり減っている。慰労会は、旧交を温めるために花見を兼ねて行われた。出席した組合員は30名。久しぶりに会った人たちの話は大いに盛り上がった。出席者は、「またこんな会を企画してほしい」と述べていた。

5月後半から6月にかけて予定されている、開拓組織および関係機関の行事は次のとおり。 5月 九州開拓連絡協議会総会(人吉) 26日 岩手県畜協第43回通常総会 28日 花平酪農協第50回通常総会 6月 10日 ジャパンビーフ農協第14回通常総会 18日 全開連第7回理事会 全国開拓振興協会 第7回理事会 全日本開拓者連盟 役員会 19日 全国開拓振興協会 第2回定時総会、第8回理事会・第4回監事会 全日本開拓者連盟 第69回通常総会 20日 肥後開拓協第6回通常総会 25日 ゆうき青森農協第4回通常総会 開拓ながさき農協 第5回通常総会 26日 静岡開拓連第66回通常総会 27日 福岡県畜協第42回通常総会 佐賀県畜協第47回通常総会 28日 埼玉県開拓連第66回通常総会

# 開拓組織の動き

### 日豪EPAの主な合意内容

| 品 目 | 合意内容  |
|-----|---|
| コメ  | 関税撤廃の対象から除外   |
| 小 麦 | 食糧用：将来の見直し<br>飼料用：民間貿易に移行し無税  |
| 乳製品 | バター、脱脂粉乳は将来の見直し<br>プロセスチーズ原料用ナチュラルチーズなどは、国産品の使用を条件に無税枠を拡大   |
| 牛 肉 | 段階的に関税を削減<br>冷蔵肉：1年目32.5%→15年目23.5%<br>冷凍肉：1年目30.5%→18年目19.5%<br>数量セーフガードを導入し、輸入量が発動基準を超えた場合、現行38.5%に引き上げ |
| 砂 糖 | 一般粗糖、精製糖は将来の見直し   |

12年の豪州からの輸入量は、牛肉等が約2万200ト、鶏肉等は実績を00トから20年かけて徐々に拡大する。3年以内でセーフガードの冷蔵牛肉、冷凍牛肉それぞれの初年度、10年目までの発動基準数量は、初年度が冷蔵13万5000ト、冷凍19万5000ト、5年目が冷蔵13万6700ト、冷凍20万1700ト、10年目が冷蔵14万5000ト、冷凍21万ト。

「私の人生記」大江ヤス 著 B5、32頁。山形県生まれのヤスさんは、1935年...

お知らせ 栃木県開拓協代表理事組合長の櫻井徳一氏より、開拓に関する貴重な資料が寄贈されましたので、ご紹介いたします。(5月1日付) 退職 岩城和宏(参事兼務事業部長)、石城戸昭作(管理部長)、上柳英人(中部支所長)、北原弘昭(家畜診療所所長) 宮崎県乳肥農協人事 (4月21日付) 全日本開拓者連盟 役員会 19日 全国開拓振興協会 第2回定時総会、第8回理事会・第4回監事会 全日本開拓者連盟 第69回通常総会 20日 肥後開拓協第6回通常総会 25日 ゆうき青森農協第4回通常総会 開拓ながさき農協 第5回通常総会 26日 静岡開拓連第66回通常総会 27日 福岡県畜協第42回通常総会 佐賀県畜協第47回通常総会 28日 埼玉県開拓連第66回通常総会



# 新潟県農業総合研究所園芸研究センター キュウリ循環型養液栽培開発

キュウリは、通常の土耕栽培より収量が少なく養液栽培に向かない品目で、導入実績が非常に少ない。

かけ流し方式では、施肥コストが高く環境に与える影響が問題となっていた。

新潟県農業総合研究所園芸研究センターは、環境負荷が少なく土耕栽培より高収量が得られる木材チップ炭を培地としたキュウリの循環型養液栽培技術を開発したので紹介する。

養液の栽培システムは、栽培ベッド、給排液タンク、給液ポンプ、フィルター、点滴チューブ、給液用タイマー、自動液肥添加装置、液肥タンクで構成されている(図1)。

養液管理は、養液が栽培ベッドと給排液タンクの間を循環する循環型で行い、培養液は新潟園研処方を用い、1日の株当たり供給量は、窒素成分で半促成作型では80~400mg、抑制作型では80~240mgとし、定期的に液肥添加前の給排液タンク内EC(電流の伝導率)を測定してECが2 ds/mを超えないよう天候や生育状況によって調整した。

整枝方法は、つる下げ整枝とし、誘引枝を半促成作型では収穫終了予定の2週間前、抑制作型では3週間前に摘心し、養分供給を停止した。

培養液は、6~18時に1回当たり500ml/株を45~60分で供給した。

試験の結果、同栽培技術は、土耕栽培

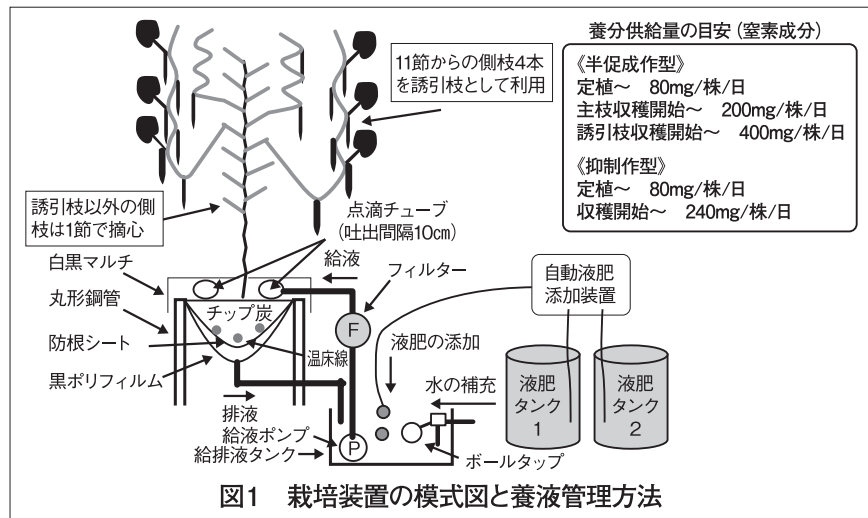


図1 栽培装置の模式図と養液管理方法

培と同等の品質で、土耕栽培と比較して1.6倍の商品果収量が得られた(図2)。

養液栽培には節成り性の高い品種が適しており、半促成作型では「フレスコダッシュ」、抑制作型では「超・彩軌」が収量性に優れている。

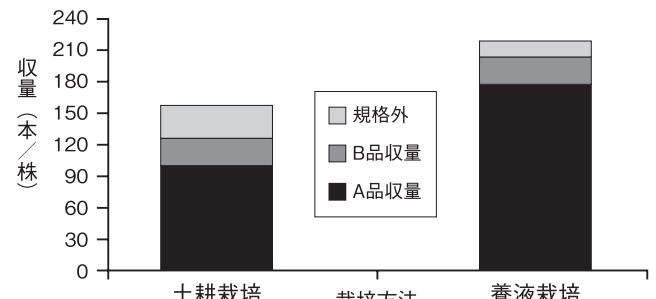


図2 土耕栽培と養液栽培の収量比較

2012年半促成作型+抑制作型 供試品種は半促成作型「フレスコダッシュ」、抑制作型「超・彩軌」

詳細は、同センターのホームページを参照のこと。

## 環境負荷少なく高収量

# 農研機構中央農業総合研究センター 土壌中リン酸新測定法開発

適正施肥は、土壌診断を行い土壌養分の状態を知ることが第一歩である。

土壌診断は、専用の設備がないと診断が困難であり、設備のない農業現場での実施可能な手法の確立が求められていた。

農研機構中央農業総合研究センターは、農業現場で活用できる土壌中リン酸の測定法を開発し、マニュアルを作成している。

開発した手法の特徴は、抽出を行わない水抽出法で、現場で分析ができるもの。抽出法は、①底面積の広い容器を用いて、土壌が薄い層になるようにして抽出することにより、振とうを行わなくても、連続的に振とうした場合と同様に水溶性リン酸が抽出される。②抽出に用いる水の量を少なくすれば、抽出時間や温度の影響が受けにくくなる。

分析方法は、①市販のリン酸簡易測定キット(毒劇物フリー)を利用し、

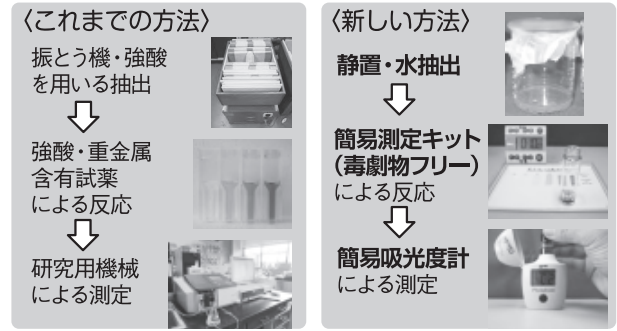
不振とう水抽出リン酸は、従来の分析法と同様に評価でき、反応時間の延長などにより、より広範囲の測定も可能。②市販の簡易吸光度計を用いて、簡単に数値化ができる。

リン酸測定法の分析費用は、畑土壌

1検体当たり120円程度、策定した減肥指針を適用して、冬春キュウリの主要産地の施肥基準から試算すると、施肥コストのうち約3割(約1.6万円/10a)が節減可能。

同センターは、同測定法がキュウリ以外の作物にも参考

### 現状の土壌診断法(リン酸)と新たな現場評価法の概要・特徴



になるとしている。詳細は、同センターのホームページを参照のこと。

## 施設キュウリで肥料削減

# 農研機構果樹研究所 暖地での安定生産が可能 ニホンナシ新品種「凜夏」

地球温暖化の進行にともない、近年、鹿児島県をはじめとした西南暖地では、主要品種の「幸水」等で花芽の枯死等の障害が発生し、生産が不安定となっている。

「幸水」は結実に結びつく短果枝が出来にくい品種であるため、より栽培

しやすく、短果枝が着生しやすい品種の開発が期待されていた。

農研機構果樹研究所は、暖地でも花芽が安定して容易に着生するとともに、「幸水」と同程度に食味が優れるニホンナシ新品種「凜夏」を育成したので紹介する。

### 主な特徴

「凜夏」は、「幸水」と比べると、樹勢は同程度であり、短果枝の着生はより多く、えき花芽の着生は同程度で、安定して花芽が着生する。収穫期は「幸水」に近い時期で、育成地では8月下旬。若木(6-7年生時)における収量は「幸水」と同程度。

「凜夏」は、重さ500g程度で「幸水」

よりも大果で、果肉硬度はより軟らかく、肉質良好。糖度は「幸水」とほぼ同程度で、pHは低く少し酸味がある。みつ症と心腐れがわずかに発生するが、程度は軽微で、日持ち性は「幸水」以上。

鹿児島県において、「幸水」では短果枝の花芽が40%以上、えき花芽が30%以上枯死したのに対し、「凜夏」ではいずれも10%以下。

黒斑病に抵抗性があり、「幸水」と同様、黒星病に対して罹病性だが、慣行防除で栽培できる。

13年11月に品種登録出願公表され、苗木は14年秋季より販売される見込み。

問い合わせは下記まで。

農研機構果樹研究所企画管理部運営チーム

TEL: 029-838-6443

## 13年産 荒茶生産量4%減少

農水省がこのほど公表した「13年産主産県の茶生産量」によると、生葉収穫量は38万3400tで、前年産に比べ1万7900t(4%)減少した。

一番茶の生育が凍霜害による被害や

4月中旬以降の低温により抑制されたことなどにより、収量が減少したとみられる。荒茶生産量は8万2800tで、前年産に比べ3100t(4%)減少した。

茶の摘採実面積(収穫実績)は3万7700haで、前年産に比べ800ha(2%)減少した。

秋田県畜産試験場

分娩前4週間以上繋留 有効

泌乳・繁殖成績良好

秋田県畜産試験場が秋田県内の酪農家の聞き取り調査を行ったところ、初産牛の疾病・事故が多かった。

要因は、「初産牛に対して経産牛と同様の管理をしている」、「育成に手が回らず、初産牛として十分な骨格に達していない」等であった。

同試験場は、タイストール牛舎における分娩前の繋留期間や繋留条件が乾物摂取量、産乳成績および繁殖成績に与える影響について比較し、酪農家が現状において工夫できる具体的管理方法を検討しているので紹介する。

試験は、初産牛19頭を用いて、分娩日前の繋留期間(搾乳牛舎へ移動した日から分娩した日までの日数)が3週間未満の区を「3週間未満区」(4頭)、3~4週間の区を「3-4週間未満区」(3頭)、「4-5週間未満区」(4頭)、「5-6週間未満区」(5頭)、「6-8週区」(3頭)の5区を設定し実施。飼料は、発酵TMR、乾草(オーチャードグラス)を自由採食とし、配合飼料を定量給与とした。

試験の結果、分娩前後1週間の飼料摂取量は、各区とも分娩後には差が認められない。分娩前は、「3週間未満区」に対して「4-5週間未満区」および「5-7週間未満区」、「6-8週区」で有意に多かった。

産乳成績では、乳量は、「3週間未満区」と比較して、「6-8週区」が有意に高く、いずれの期間においても「3週間未満区」と比較して、繋留期間が長い区が乳量も高くなる傾向が認められた(図1)。乳脂肪率は、1ヵ月目で「3週間未満区」が「5-6週間未満区」に対して有意に高く、ケトosisや脂

肪肝へのリスクが高まっていたことが想定される。2ヵ月目以降は各区間に差はなかった。乳蛋白率および無脂固形分率は、各区間に差はなかった。

分娩後の増体日量は、搾乳牛舎への移動時、「経産泌乳牛に挟まれる配置で繋留した区」(6頭)と「両隣が初産牛または片側が初産牛で片側の牛床1つ空いている配置で繋留した区」(5頭)と比較した。

1ヵ月目の体重はマイナスに転じ、2ヵ月目には回復し、3ヵ月目には増体へ向かった。

しかし、経産牛に挟まれて繋留した場合、体重の回復が遅れていることから、初産牛の採食行動には不利な条件が重なり、分娩後も長期間に渡り乾物摂取量が抑制されていると想定される(図2)。

繁殖成績では、初回授精までの日数は、「3週間未満区」に対して「6-8週区」で有意に短かった。受胎までの日数は、「3週間未満区」に対して「4-5週間未満区」および「6-8週区」間で有意に短かった。

同試験場は、試験の結果から酪農家が現状でできる対策として、育成から搾乳牛舎への繋留の時期を分娩前1~2ヵ月に確実に移動させ、馴致期間をなるべく長めにとり(少なくとも4週間以上)、分娩前の搾乳牛舎への移動時に経産牛による影響が少ない配置を行うことにより、分娩前後の乾物摂取量が増加し、泌乳成績および繁殖成

図1 分娩前繋留期間別分娩後の乳量推移

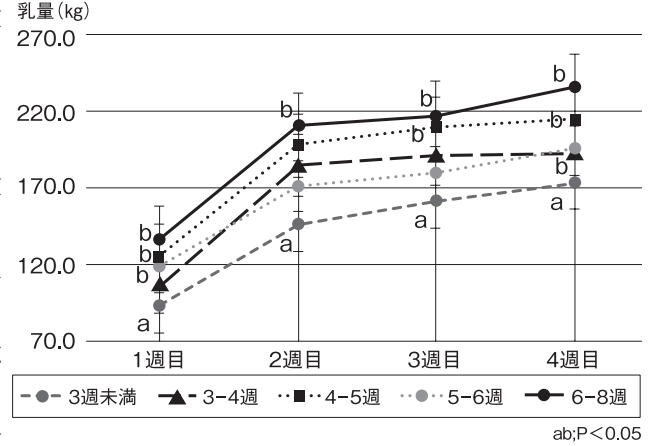
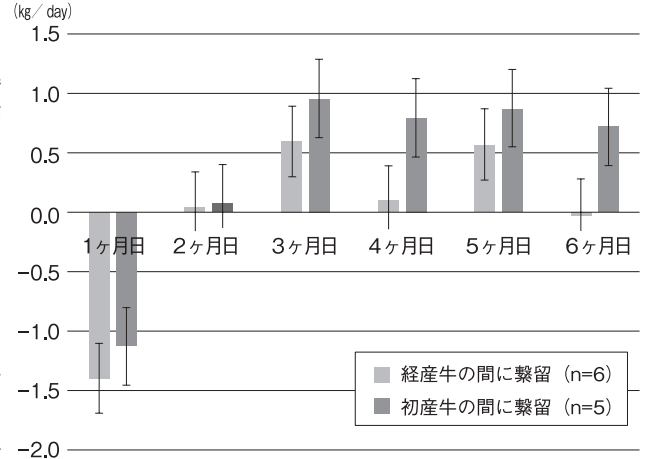


図2 繋留条件による分娩後6ヶ月の増体重



績についても良好な結果が得られている。

が認められた。ストックヤードに保管されているロールペールをサーモグラフィで撮影を行い、局所的な温度上昇が見られた位置でカビの発生が見られた。

ストックヤードでの保管時や取引時に、サーモグラフィを用いて撮影することにより、カビ類発生が認められたロールを流通前に選別が可能になるため、飼料品質の底上げが期待でき、耕種農家産の飼料の利用と畜産農家から出た堆肥の利用という有機的な耕畜連携の円滑化につながるものである。

同研究所は留意点として、太陽光の影響の少ない日陰や夜間での撮影が望ましく、すべての面が写るように様々な方向での撮影が望ましいとしている。

三重県畜産研究所

稲ロールペールサイレージ 品質検査技術

サーモグラフィでカビ発見

稲ロールペールサイレージの流通が増加しており、流通飼料としての品質の確保が重要な課題である。

サイレージはその特性上、わずかなラップフィルムの破損が品質に影響するため、出荷前の品質確認が重要である。

従来の品質検査法では、サイレージを開封しサンプルを採取するため、商品価値が損なわれる等のことから、開封せずに迅速に検査法の開発が望まれていた。

三重県畜産研究所は、カビ類が発

生したロールペールの排除することで流通飼料の品質の底上げを行うことを目的に、カビ類による変敗が発生したサイレージは、微生物の代謝により発生した部位の温度が上昇することを利用し、サーモグラフィを用いた非破壊による品質検査技術を開発した。

穴を開けたロールペールサイレージは穴の周辺部の温度が上昇し、その様子をラップフィルム越しにサーモグラフィで周囲との温度差として捉えることができた。

温度上昇部の周囲には、カビの発生

農研機構中央農業総合研究センター

通年放牧体系を開発

省力化・コスト低減が可能

水田を利用した牛の放牧は、飼料生産量の制約等から放牧期間が限られるなどの課題があった。

水田で効率的な放牧を行うには、適した草種の選定や放牧利用における管理技術事故発生へのリスクや環境への配慮が求められていた。

農研機構中央農業総合研究センターは、水田放牧に適した牧草や飼料イネの栽培と放牧利用技術を組み合わせた通年放牧体系を開発し、生産者および

普及指導者向けの「水田放牧の手引き」を作成したので紹介する。

放牧利用技術を用いると、イタリアンライグラスやバヒアグラスなどの牧草と「たちすずか」等の茎葉型飼料イネ専用品種、イネWCSを組み合わせることで、繁殖牛の約7ヵ月の通年放牧飼養が可能。

この放牧飼養で、栄養状態と繁殖成績は向上し、飼養管理の省力化とコスト低減、規模拡大ができる(図1、図

2)。

放牧にともなうリスクとその低減方法、衛生管理上の留意点などについても触れられている。

水田を利用した畜産経営モデルや水田作経営モデル、地域水田農業ビジョン等を策定する際や省力・低コストの肉用子牛生産の推進に活用が可能である。

詳細は、同センターのホームページを参照のこと。

図1 放牧中の繁殖牛の体重推移

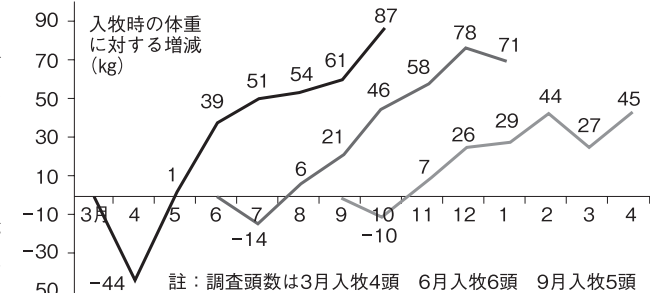
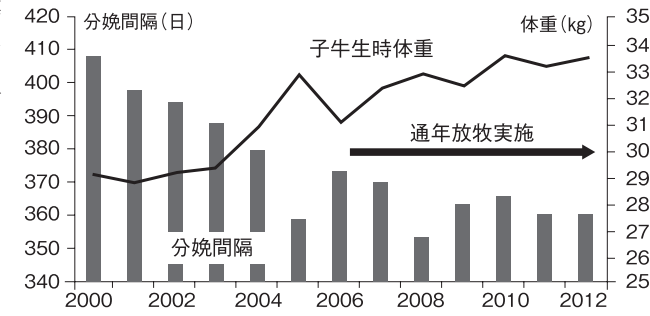


図2 水田通年放牧実証経営の繁殖成績の推移



## 徳島県農林水産総合技術支援センター 人工乳にシヨ糖添加で早期発育有効 粗飼料は21日齢から給与効果的

近年、黒毛和種繁殖農家での早期母子分離技術の導入などにより、人工哺乳される産子が増えている。子牛が効率よくエネルギーを吸収できるよう、人工乳摂取を促し第一胃絨毛や第一胃壁の厚さを発達させる飼養管理技術の確立が求められている。

徳島県農林水産総合技術支援センター畜産研究課は、哺育・育成期において、初期発育に優れ、第一胃絨毛などの発達を促す飼育管理技術を検討するため、粗飼料の給与開始時期試験と人工乳へのシヨ糖添加試験を実施し、優良肥育素牛生産につながる哺育育成技術を開発した。

粗飼料給与開始時期の試験では、黒毛和種子牛各区分3頭(雄1頭、雌2頭)を用いて、生後5～224日齢までを試験期間とし、粗飼料(チモシー)の給与開始を5日齢から飽食とする「対照区」、粗飼料の給与開始を21日齢から飽食とする「粗21区」、粗飼料の給与開始を70日齢(離乳後)から飽食とする「粗70区」の3区分を設定。生後5日目まで母子同居とし、以降は分離単飼とした。代用乳給与方法は各区分共通とし、生後7日齢まで1日当たり300g、14日齢まで同500g、49日齢まで同800g、56日齢まで同500g、63日

齢まで同300g、70日齢まで同200gとした。人工乳を生後5日齢より飽食とし、84日齢まで給与。その後は育成期用濃厚飼料(上限3kg)を給与した。調査項目は、飼料摂取量、体重、体高、血液検査など。

試験の結果、酪酸の代謝物質で子牛の第一胃発達の指標となる血中BHB(βヒドロキ酪酸)の濃度は、離乳時である84日齢までに、「粗21区」および「粗70区」で基準とされる300μmol/Lに達した。「対照区」が300μmol/Lに達したのは112日齢以降であった。112日齢以降は、どの区分も400～500μmol/Lの範囲で推移した(図1)。

通算の濃厚飼料摂取量は、「対照区」が449.2kg、「粗21区」が453.4kg、「粗70区」が424.4kg。56日齢まで全区分ともほぼ同等であったが、112日齢以降は「粗21区」が最も多くなった。

試験終了時の体重・1日当たり増体量は、「対照区」が213.8kg・0.83kg、「粗21区」が226.0kg・0.87kg、「粗70区」が209.2kg・0.81kg。「粗21区」において56日齢以降、最も良好な発育を示した。

人工乳へのシヨ糖添加の試験では、黒毛和種子牛各区分3頭を用いて、シヨ糖を添加しない「対照区」、人工乳の

給与量に対してシヨ糖0.1%を添加する「シヨ糖0.1%区」、人工乳の給与量に対してシヨ糖を0.3%給与する「シヨ糖0.3%区」の3区分を設定。粗飼料は5日齢から飽食。試験方法や調査項目は、粗飼料給与開始期の試験と同様とした。

試験の結果、血中BHB濃度は、「シヨ糖0.1%区」および「シヨ糖0.3%区」で56日齢において300μmol/Lに達した。「対照区」が300μmol/Lに達したのは112日齢だった。「シヨ糖0.3%区」では下痢が散発したためか、血中BHB濃度が84、168日齢時に低下した。

哺育期での人工乳摂取量は、「対照区」が84日齢で43.2kg、「シヨ糖0.1%区」が84日齢で53.0kg、「シヨ糖0.3%区」が84日齢で48.6kgとなり、「シヨ糖0.1%区」で最も人工乳摂取量が多い結果となった(図2)。

通算の濃厚飼料摂取量は、「対照区」が449.2kg、「シヨ糖0.1%区」が449.5kgとほぼ同等で、「シヨ糖0.3%区」が425.0kgであった。

試験終了時の体重・1日当たり増体量は、「対照区」が213.8kg・0.83kg、「シヨ糖0.1%区」が223.8kg・0.86kg、「シヨ糖0.3%区」が224.2kg・0.88kg。哺育期から育成中期にあたる56～154日齢において、シヨ糖添加両区分で良好な発育がみられた。

同センターは、両試験の結果から、初期の1日当たり増体量は、「粗21区」、「シヨ糖0.1%区」で優れており、第一

図1 濃厚飼料摂取量と血中BHB濃度の推移

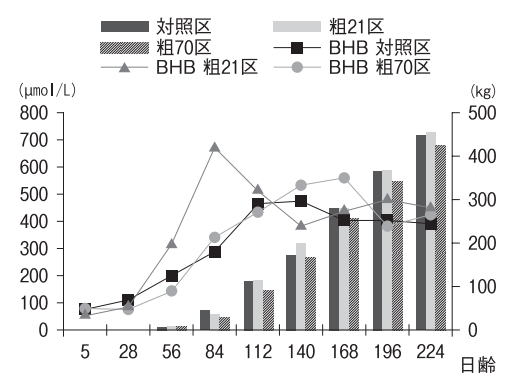
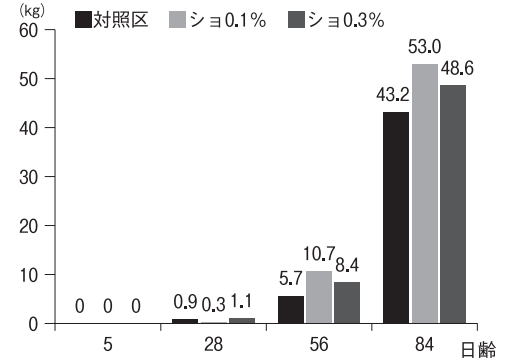


図2 哺育期の人工乳摂取量



胃絨毛の発達指標となる血中BHBは、「粗21区」、「シヨ糖0.1%区」で早期に濃度が上昇したことから、粗飼料を21日齢から給与を開始し、人工乳に0.1%程度シヨ糖を添加することで初期の人工乳摂取を促し、第一胃の発達した肥育素牛を育成できるとしている。ただし、「0.3%シヨ糖添加区」にて下痢が散発したことから、シヨ糖の添加には注意が必要だと見込まれる。

なお、粗飼料給与開始時期の試験において、濃厚飼料摂取量が「粗70区」で最も少ない結果となったことから、粗飼料を70日齢から給与することは哺育育成期における低コスト化の一助になると考えられるとしている。

## 衛生関係者一体での防疫重要 全国家畜衛生主任者会議開催

農水省は4月22日、東京都内で全国家畜衛生主任者会議を開催し、都道府県の家畜衛生担当者のほか、畜産関係者など約300人が参加した。同会議は、前年度の家畜衛生に関する動向や今後の推進方針について、情報共有や意見交換を目的に毎年開かれているもの。福島靖正審議官は開会の挨拶で、「鳥インフルエンザの防疫のためには、早期通報の徹底と万が一発生した場合の体制整備の確立を再確認してほしい。PED(豚流行性下痢)は現在、33道県で発生している。家畜疾病の発生予防、まん延防止は国、都道府県、生産者などが一体となって取り組むことが重要」と述べた。その後、農水省の各担当者からの報告がなされた。

動物衛生課は「熊本での鳥インフルエンザの防疫措置が完了し、移動制限措置が解除される見通しなのは、農家の

迅速な報告、農協・市町村の支援、熊本県の担当人員を配置した上での徹底した作業による成果であり、他県でも参考としてほしい」と農家や都道府県が一体となって防疫に取り組む必要性を訴えた。PEDについては、「飼養衛生管理の徹底を訴えているが拡大防止に至っていない。ワクチンの安定供給のために、需要見込み量、メーカーの製造見込み量を把握するため情報収集している。感染拡大の原因については、と畜場への出荷、車両・人の移動などにもなう感染が考えられるが、わからない面があるため、情報提供をお願いしたい」と各都道府県担当者に協力を求めた。

口蹄疫に関する防疫演習が14年2月12日から26日にわたり47都道府県で行われた。口蹄疫を疑う事例の通報については、病性判定のための写真撮影が

病変部位以外の口腔、蹄などで全て100%実施された。全ての自治体で、畜種や飼養頭数などの農場に関する情報は適切に更新され改善がみられた。消毒ポイントの設定については、市町村との協議まで済んでいる消毒ポイントは19%、市町村との協議に加えて道路管理者などとの協議まで済んでいる消毒ポイントは20%にとどまっている。発生時に消毒ポイントを迅速に設置できるよう、実際に設置が可能であるか、市町村や道路管理者との間で候補地の

事前調整を進める必要があることがわかった。殺処分作業については、18県が24時間以内の作業終了が困難との回答であった。運搬を含め埋却作業に時間がかかることなどが課題として浮き彫りになった。同省は、「迅速な初動対応や発生農場での防疫作業を早期に完了するためには、市町村・関係団体等と日頃から発生時に備えた防疫対応のシミュレーションを行うなど連携を密にし、速やかに対応できる体制を整えておくことが重要」と強調した。

## 新マルキン14年3月分 交雑種・乳用種で発動

農畜産業振興機構は、14年3月分の肉用牛肥育経営安定特別対策(新マルキン)事業の補てん金単価を公表した。前回と同様に交雑種、乳用種で粗収益が生産費を下回ったため、補てんが行われる。

3月分の1頭当たり補てん金単価

は、交雑種が6万円、乳用種が6万1300円となった。

地域算定県(肉専用種)は、広島、福岡、佐賀、熊本、鹿児島で発動となり、補てん金はそれぞれ1万3200円、5200円、7300円、2万3000円、1万2200円となった。

14年度の同事業の肥育牛1頭当たりの生産者積立金は、肉専用種が1万8000円、交雑種が3万円、乳用種が2万円となった。

# 畜産物需給見通し

## 牛枝肉

全品種出荷頭数・  
輸入量減少続き相  
場堅調か

4月は、消費税増税にともない、消費者の節約志向が予想されていたが、大型連休手当てや焼き材需要が進み、引き合いが徐々に強まったため、前月の相場を上回った。

【乳去勢】4月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3は上場がなく、B2は926円(前年同月比123%)で、前月に比べ120円上げた。

農畜産業振興機構は、5月の乳用種牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万3900頭(同104%)と予測している。5月の牛肉輸入量は、4万1900t(同76%)、うち冷蔵品1万8100t(同80%)、冷凍品2万3800t(同72%)と予測している。冷蔵品、冷凍品ともに、現地相場高や他の輸入国との競合などから、前年同月を下回ると見込んでいる。

【F<sub>1</sub>去勢】4月の東京食肉市場F<sub>1</sub>去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1267円(前年同月比106%)、B2は1149円(同105%)となった。前月に比べそれぞれ86円、102円上げた。

農畜産業振興機構は、5月の全国出荷頭数を1万9500頭(同104%)と引き続き前年同月を上回ると予測している。

【和去勢】4月の東京食肉市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が

1898円(前年同月比103%)、A3は1717円(同102%)となった。前月に比べそれぞれ111円、91円上げた。

農畜産業振興機構は、5月の全国出荷頭数を3万9300頭(同94%)と見込んでいる。離農の進行にともない、生産頭数が減少しているため、前年同月を下回ると予測している。

乳用種と交雑種は増加するものの、和牛は減少し、全品種の出荷頭数は、前年同月比99%と予測している。

これからは、梅雨期に入ることもあり、焼き材需要が軟調に推移し、次第に引き合いが弱まる時期となる。しかし、今年は総出荷頭数、輸入量ともに前年同月を下回ると予測されているため、品薄となり、相場が堅調に推移すると見込まれる。

このようなことから、向こう1ヵ月の相場は、大阪市場の乳去勢平均枝肉単価は、B3が900~950、B2は850~900円、東京食肉市場の税込み平均枝肉単価は、F<sub>1</sub>去勢B3が1200~1300円、B2は1050~1150円、和去勢A4が1800~1900円、A3は1650~1750円での展開か。

## 品薄で相場高続くか

4月の子牛取引状況

(単価:頭、kg)

| ブロック名 | 品種               | 頭数     |        | 重量  |     | 1頭当たり金額 |         | 単価/kg |       |
|-------|------------------|--------|--------|-----|-----|---------|---------|-------|-------|
|       |                  | 当月     | 前月     | 当月  | 前月  | 当月      | 前月      | 当月    | 前月    |
| 北海道   | 乳去               | 605    | 441    | 296 | 289 | 134,772 | 139,961 | 455   | 484   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 235    | 1,134  | 311 | 306 | 307,131 | 326,540 | 988   | 1,067 |
|       | 和去               | 887    | 1,607  | 304 | 302 | 591,734 | 564,260 | 1,946 | 1,868 |
| 東北    | 乳去               | 3      | 3      | 163 | 181 | 41,040  | 24,150  | 252   | 134   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 32     | 11     | 293 | 271 | 318,769 | 255,245 | 1,087 | 941   |
|       | 和去               | 2,088  | 2,768  | 303 | 298 | 607,466 | 570,328 | 2,008 | 1,913 |
| 関東    | 乳去               | 28     | 36     | 264 | 246 | 106,798 | 104,563 | 405   | 425   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 225    | 187    | 299 | 294 | 330,834 | 323,753 | 1,106 | 1,102 |
|       | 和去               | 874    | 723    | 270 | 259 | 557,966 | 536,902 | 2,067 | 2,074 |
| 北陸    | 乳去               | -      | -      | -   | -   | -       | -       | -     | -     |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 2      | -      | 256 | -   | 302,400 | -       | 1,181 | -     |
|       | 和去               | -      | 57     | -   | 286 | -       | 551,010 | -     | 1,927 |
| 東海    | 乳去               | 45     | 64     | 285 | 283 | 158,303 | 157,221 | 555   | 555   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 107    | 62     | 291 | 295 | 324,171 | 353,341 | 1,115 | 1,198 |
|       | 和去               | 274    | 431    | 264 | 266 | 613,873 | 589,546 | 2,327 | 2,218 |
| 近畿    | 乳去               | -      | -      | -   | -   | -       | -       | -     | -     |
|       | F <sub>1</sub> 去 | -      | -      | -   | -   | -       | -       | -     | -     |
|       | 和去               | 385    | 523    | 258 | 256 | 585,259 | 556,051 | 2,268 | 2,172 |
| 中四国   | 乳去               | 112    | 154    | 277 | 267 | 162,694 | 154,915 | 587   | 581   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 263    | 246    | 281 | 275 | 331,728 | 333,247 | 1,182 | 1,213 |
|       | 和去               | 758    | 913    | 279 | 224 | 547,049 | 545,613 | 1,960 | 2,435 |
| 九州・沖縄 | 乳去               | 58     | 44     | 284 | 280 | 133,063 | 143,587 | 469   | 512   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 408    | 436    | 292 | 289 | 317,462 | 326,308 | 1,086 | 1,128 |
|       | 和去               | 7,524  | 10,866 | 280 | 277 | 587,819 | 566,303 | 2,097 | 2,048 |
| 全国    | 乳去               | 851    | 742    | 291 | 281 | 138,324 | 142,583 | 475   | 507   |
|       | F <sub>1</sub> 去 | 1,272  | 2,076  | 294 | 297 | 321,441 | 327,458 | 1,093 | 1,103 |
|       | 和去               | 12,790 | 17,888 | 284 | 281 | 587,323 | 564,710 | 2,068 | 2,010 |

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計。当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 乳用種品薄で堅調推移 衛生管理の徹底を

連休中の荷動きは、購買者の話を聞くとまずまずといったところか。相変わらずロースの動きは鈍いが、ウデやモモ、バラなどの焼き材の動きは良かったようだ。4月からの消費税増税による相場への影響はみられていない。

乳用種も相場は堅調に推移している。一定の需要がある中で交雑種などからの代替は難しく、南港市場でも上場頭数が昨年と比べ3月は68%、4月は56%と大幅減で需要と供給のバランスが崩れており品薄高だ。梅雨時期は例年消費が冷え込むが、上場頭数の減少もあり、下げて小幅に留まるので

はというのが市場関係者の見方だ。

南港市場でも、豚枝肉価格が高騰している。国内外で発生している豚流行性下痢(PED)、主産地米国での高値や円安の影響、さらには輸入制度の厳格運用により輸入量も減少しており、異常豚価を生んでいる。

4月上場頭数は昨年同月に比べ92%程度。生産者が市場へ輸送中にPEDの病原体が輸送車等に付着するリスクを懸念しており、遠方からの荷が集りにくい。夏に向けてさらに搬入頭数の減少が続くと見込まれ、しばらくは品薄高が続くそう。

南港市場では、踏み込み槽による車両の消毒に加えて、各ポイントに消毒用の噴霧器などを設置するなど消毒の徹底・強化を行っている。生産者も改めて衛生管理の徹底を心がけたい。

(全開連西日本支所神戸事業所 石川友也)



## 豚枝肉

出荷頭数、輸入量ともに少なく強もちあいか

4月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が586円(前年同月比125%)、中物は563円(同129%)となった。前月に比べ、それぞれ87円、89円上げた。全国出荷頭数、輸入量が予測より少なかった一方、大型連休に向けた手当て買いなどで相場が大きく上昇し、高値で推移した。

農水省食肉鶏卵課は、全国出荷頭数を5月は139万頭(同98%)、6月は125万3000頭(同100%)と予測している。

農畜産業振興機構は、5月の輸入量

## 素牛

素牛不足解消せず、相場は底堅い展開続くか

【乳素牛】4月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が13万8324円(前年同月比127%)、F<sub>1</sub>去勢が32万1441円(同113%)となった。前月に比べ乳去勢は4259円、F<sub>1</sub>去勢は6017円下げた。前月と同様に頭数不足が続き、一部の需要に対応できない状況となり、引き続き高値となった。

素牛不足は解消せず、集荷は前年実績を割り、需給が引き続きひっ迫すると見込まれ、相場は総じて強含みで推移するか。

【スモール】4月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が5万8498円(前年同月比103%)、F<sub>1</sub>雄が18万3573円(同115%)となった。

を5万4900t(同83%)、うち冷蔵品が2万100t(同76%)、冷凍品が3万4800t(同88%)と予測している。冷蔵品は、現地相場高や円安傾向の継続などにより、前年同月を大幅に下回る輸入になると予測している。

出荷頭数、輸入量ともに前年同月を下回る予測で品薄となる見込み。相場は堅調に推移するか。豚流行性下痢の感染拡大は、今後の出荷頭数に少しずつ影響が大きくなると見込まれる。

このようなことから、向こう1ヵ月の相場は、強もちあいが予測される。東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が580~600円、中物が550~570円での展開か。

前月に比べ乳雄は1823円上げ、F<sub>1</sub>雄は2271円下げた。取引頭数は乳雄、F<sub>1</sub>雄とも前月に比べ増加しており、それぞれ前月比119%、122%、前年同月比97%、105%となった。両品種とも品薄感が続いており、依然、高値となっている。両品種とも頭数不足が続き、相場は強含みで推移するか。

【和子牛】4月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、58万7323円(前年同月比117%)で、前月に比べ2万2613円上げた。素牛の絶対量不足に加え、需要期の12月出荷に向けた手当てが増え、相場を押し上げた。

高齢化による離農などで絶対的に繁殖牛の数が少なくなり、子牛不足が慢性化している。肥育農家の空き牛舎が目立ち、大きな下げは見込めないため、底堅い展開が続くか。